

伸ばすことが明らかになった(図4)。

水底にある主軸は数cmの長さで、そこに多数の包葉や水中茎が根生状態につき、短縮した多くの節から多数の不定根が出て、底土中に伸びている。主軸は土中の下部から次第に腐り、わずかであるが上に向け伸長するので、多数の根が主軸をささえ、タコの足状になっている。この様子は干上がった池でときどき観察される。

7月初旬より、水中茎につく浮葉の葉柄基部(節)に太い不定根がイカリ状についた殖芽を形成する。この不定根の中には多量のデンプンが貯えられている。10月下旬に

は、水中茎が枯れて腐るので、浮葉をつけた殖芽が浮遊するのがみられる。これは風の働きで移動するが、ときどき岸辺に打ち上げられているのが観察される。やがて浮葉も枯れて腐り、殖芽は水底に沈み、そこで越冬することになる。(第7回水草研究会全国集会の発表要旨)

#### 参考文献

脇田 晴美(1957):知多半島南部の水生植物の調査およびガガブタ・ミズオオバコの状態学的考察。中部日本自然科学調査団報告,第1報,15-18.

## 山口県田布施町に裏面淡緑色のコウキクサ

### 南 敦

1985年11月9日、山口県熊毛郡田布施町麻郷、田布施町民グラウンドの下方の水田で、コウキクサ *Lemna minor* L.(裏面淡緑色型)の純群落を見た。その場所は5万分の1地形図〔柳井〕にあたる。

葉状体の表面は凸レンズにふくらみ、光沢があり、深緑色から鮮緑色。全形は円形に近い広楕円形から卵状楕円形。長さは約4mm、幅約3mm。厚さ0.4mm。先端は円形からへら状形。葉脈は不明瞭。裏面は淡緑色。特にルーペで気をつけてみれば、まれに根のつけねの辺りがほんの少し紫がかったのがある。

葉状体の裏面については次のような記載がある。

①北村四郎・村田源・小山鉄夫著(1964):原色日本植物図鑑草本編(Ⅲ)単子葉類には「下面帯紫色」と記されている。

②大井次三郎著(1972):日本植物誌には「葉状体の下面は帯紫色、北海道に記録がある」と記されている。

③杉本順一著(1973):日本草本植物総検索誌。単子葉類には「葉状体は表面濃緑色、下面は紅紫色、倒卵形」と記されている。

④大滝末男著(1980):日本水生植物図鑑には「裏面は光沢がなく、淡緑色、根のつけね周辺に紫紅色または紫茶褐色の斑紋がある」と記されている。

⑤植村修二は水草研究会会報11号(1983年3月)-p8『大阪府堺市におけるウキクサ科の分布』において「堺市内のコウキクサはすべて葉状体のうらはは緑色であり、…この点については一時的、つまり生理的なものか、遺伝

的に固定されたものか今後検討していく必要があると思われる」と記している。

田布施町のとなりの柳井市古開作のもの(1981年大滝末男先生にご同定いただいている)を見ると田布施町麻郷のものと同形同大で、裏面は殆んど全部のものが淡緑色、まれにごくごくわずかに紫紅色を帯びたものや淡紫紅色を帯びたものがある。

分布については、多くの文献で「温帯ないし寒帯」とされているが、田布施町や柳井市の採集地にはアカウキクサなどが生育しているし、ホテイアオイも普通の年は野外でどうにか越冬している。即ち、暖帯中部である。

証拠標本は山口県立山口博物館に納入した。

## 柿田川の水草

### 浜島 繁隆

柿田川は静岡県清水町の国道1号線のすぐ下から、日に120万トンの水が湧き出て、狩野川に合流するまでのわずか1,200mの川である。川が短い割に水量は多く、年間を通して変わることなく、水温も15℃(±1℃)、pH7.2と変動は少ない(清水町発行パンフレットより)。

1985年8月22日、この川の水草を調査した。流水中にカワジシャ(沈水状態)、バイカモ(ミシマバイカモ)、エビモ、フサモ、ヤナギモとコカナダモの繁茂がいちじりしい。岸辺にワサビ田に似たオランダガラスを栽培する田がみられる。ここにヒンジモ、アオウキクサ、コウキクサ、ヒメウキクサがみられた。さらにイボウキクサがみられたが、この種は名古屋周辺ではかなり富栄養化した水域に生育するので、このようなきれいな水域に繁茂しているのに驚いた。オオアカウキクサ、ミクリもわずかみられた。